

草木で染める

1. 染色の今、昔

衣服にしてもカーテン、じゅうたんにしても、布を使った製品は様々な色に染められています。現在、布を染めるために普通に使われている染料は石油や石炭を原料にして作られた化学染料がほとんどですが、化学染料の始まりは 1856 年のことです。ほんの 140 年ほど前まで染め物といえば、草や木などから取り出した染料で染める「草木染め」が行われていたのです。

草木染めのために栽培された植物で有名なものには赤色を染めるベニバナやアカネ、青色のアイなどがあります。黄色ではカリヤスやキハダがあります。これらの各色を順に重ねて染めることで様々な色に染めることもできます。

ところで、化学の進歩によって草木染めの色素を人工的に作ることもできるようになりました。例えば、アカネの中に入っているアリザリンという染料は 1868 年に、アイの中にあるインジコという染料は 1880 年にそれぞれ化学的に作られ、現在では、アカネやアイにとってかわって使われています。アリザリンやインジゴを使った化学染めでは色に不純物がないため、はっきりとした色に染め上がりますが、アカネやアイを使った草木染めでは様々な成分によって深みのある色に染まるようです。

2. 身近な草木や材料で染める

染色用の植物のいくつかは漢方薬を扱っているお店で買うこともできますが、ここではあまりお金をかけないで手に入れることのできる野原に生えている草やスーパーで手に入る材料で染める方法を紹介します。ただし、染まる色は黄色から茶色系統のものが多く、草木染めは同じように染めても出来上がりがそれぞれ違ってくるので、世界でただ一枚しかないソシカチなどを作ることができます。

3. 用意するもの

1. 染料をとる材料：

野原や河原：ススキ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ（花も可）など

台所の材料：カレー粉 コーヒー、紅茶、タマネギの皮など

2. 染めたい白い布（木綿または絹）：布は一度洗って表面の油分や糊を洗い流しておきます。

3. 道具：ホーローびきの鍋 1個（染料を煮出します。アルミの鍋だと鍋の表面が変色します）、ざる 1個（染料液と草を分けます）、ポリワツ 2個（染め液を入れる物と、媒染剤（はいせんざい：色止め剤）を入れる物、棒 1本

4. 媒染剤（色止め）：ミョウバン 10g を 3リットルほどの水に溶かします（0.2～0.5%濃度）

4. 染め方（ハンカチ程度の大きさの布を染める場合）

1. 染料の作り方

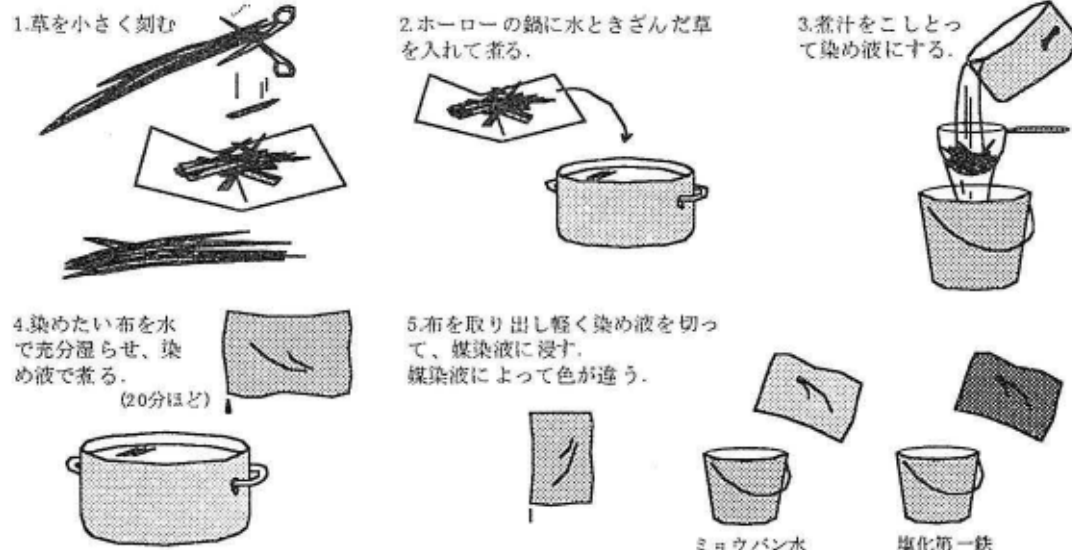
- 1) 4リットル程度の水が入るホーローの鍋に染料をとる材料（草を使う場合は染めたい布の2倍程度の重さ、紅茶など台所の材料を使う場合は染めたい布の半分程度の重さ）を入れ、水を3リットル程度入れて20分程度煮出します。なお、草の場合は刈り取ってから日がたつと染まりにくくなる物が多いようです。
- 2) ポリバケツの上にザルを置き、煮出した鍋の中身をあけて煮汁と草とを分け、煮汁だけを再び鍋にもどします。

2. 布を染める

- 1) 染めたい布を水で十分に濡らしてから、鍋の染め液の中に入れ、20分ほど煮ます（布にもようをつけたいときは、絞り染めにします）。布の一部が水面から浮き上がらないように棒でときどき押さえてやると染めムラがおきにくくなります。
- 2) 火を止めて布を棒で取り出し、軽く染め液を切って媒染液（色止め液）の中に浸します。布の中に泡がたまらないようにしてそのまま30分程度浸してから、良く水洗いして乾かします。出来上がりの色が薄い場合は1）、2）の操作を繰り返します。

草木染めでは、色止めに使う媒染剤の種類が変わると出来あがりの色が大きくちがってきます。ミョウバンを使うと明るい黄色系統の色になりますが、塩化第一鉄という薬品を使うと灰色から黒っぽい色に染め上がります。

（ 朴木 英治 ）



富山市科学文化センター

〒939 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764-91-2123)

平成9年8月1日